

## 中島友玄の患者の通院圏

木下 浩<sup>1)</sup>, 中島 洋一<sup>2)</sup><sup>1)</sup>元岡山県立博物館学芸員, <sup>2)</sup>中島病院理事長

瀬戸内市邑久町北島の中島家には古医書や多くの古文書など膨大な医学資料が残されており、その中のいくつかについては既に紹介されてきた。医学資料を残した中心人物は中島友玄（1808～1876）である。友玄は鴨方藩医武井養貞や京都の吉益北州など医学を学び、天保8年（1837）郷里に帰郷、父宗仙の跡を継いで開業し、在村医として地域の医療に貢献し、明治9年（1876）に亡くなった。友玄の種痘への関わりについては既に紹介したが、その他にも友玄は多くの書状や古文書を残していた。その中に3冊の患者名簿が残されている。それが「配剤謝義人名籍」「配剤謝義姓名記」「配剤謝義姓名録」である。

この3冊は、友玄が郷里で開業していたうちの嘉永七年（安政元）（1854）から明治四年（1871）までの17年間の患者名簿で、「配剤謝義姓名記」は地元邑久郡の東方地域、「配剤謝義姓名録」は邑久郡の西方地域と郷里の北地村内、「配剤謝義人名籍」は邑久郡以外の郡部や他国、島しょなどと区別している。いずれも名や支払金額が記載されているが、診断や病名、月日などは記載されていない。3冊合わせて延べ6,600人を超える人名が記載されており、これを分析すると、中島家に通院した患者の通院圏と友玄の在村医としての姿が見えてくる。

友玄が開業した北地村は、邑久郡の中央西部に位置している。そこに通院した患者の一番多い郡は地元邑久郡で約5,300人と全体の約81%を占める。次いで吉井川を挟んで西側に隣接する上道郡（約10%）、以下、児島湾を挟んだ西側の児島郡（約2%）、和気郡（東側に隣接）、赤坂郡（北西部）、津高郡、磐梨郡、御野郡と続く。3冊に記録されている郡は8郡、その他に島・岡山・他国がそれぞれ約2%で郡とは別に区別されて記載されている。他国の内訳は美作国と備中国が大半で、その他には阿波（2名）・周防・讃岐・伊勢（3名）・丹後・備後・伊予が記載されているが、全体としてはわずかである。患者数から考えると、通院圏は偶然にも美作・備中と合わせて現在の岡山県内が想定されるが、これは北地村が備前国全体の中央南部に位置することも関係があるであろう。その中でも邑久郡と西隣の上道郡で90%以上を占めることから、友玄が地域に密着した在村医であったことが分かる。

このことを別の医師と比較してみる。友玄の北地村から北東へ約4km離れた瀬戸内市邑久町豆田の松原家に配剤記が残されている。友玄より少し時代が遡るが文政2年の配剤記から患者の通院圏を調査すると、邑久郡（約25%）、上道郡（約22%）、赤坂郡（約12%）、和気郡（約9%）、児島郡（約8%）島しょ（約6%）、磐梨郡（約4%）と続く。同じ邑久郡ということもあり、郡別の順位にはそれほど変動はないが、パーセンテージが大きく違っている。松原家は邑久郡の数値が友玄と比べて大きく下がっており、他郡が全体的に大きいパーセンテージを占めている。その理由は、松原家が「豆田の小児丸」という薬を扱った小児専門医であったことであろう。実際、松原家の配剤記を見ると、10才以下の患者が80%以上を占めている。残念ながら友玄の3冊の記録には年齢は記載されていないが、これほどの専門性はなかったと考えられる。松原家には備前国の各地から小児科医としての専門性を求めて通院するのに対し、友玄はまさに在村医として地域の医療に尽くしたということがこれらの数字から読み取れる。

邑久郡はさらに細かく村別に分けて記載されている。一番患者が多いのは地元北地村であり、17年間で約1,200人の患者が友玄のところへ通院している。また、周辺の村でも患者数500人を超える村が2村、400人を超える村が1村あり、地域の住民と友玄との結びつきが強かったことがこのことから分かるのである。